

厳島神社所蔵の刀剣

——寄進文書を中心に——

稲田和彦

(一)

安芸の厳島神社は創建いらい数多くの宝物を伝えて来ているが、なかでも刀剣類が占めるウェイトは質量ともに大きく、その総数は二百口を超え、内容も太刀・刀・脇指・短刀・槍・薙刀など各種類が見受けられる。また、これらの刀剣には直刀から湾刀へと移行する平安後期の古刀から幕末の鍛刀界の最期を飾った新刀に至るまで幅広い各時代の作刀で集約されている。刀剣はほとんど奉納によってもたらされたが、中には国宝 宝相華文螺鈿平塵飾太刀のように、安徳天皇の御玩具と伝えられて神宝となったものもある。しかし、これらの古神宝類の一部は、記録によると承安・治承年間（一一七一〜八〇）に後白河上皇、建春門院、高倉上皇などによって奉納されたものであることが推定された。螺鈿で宝相華文を意匠にした平安時代の飾太刀は少なく他に此類の稀なるもので、この一群の刀剣の価値をさらに高めている。寄進者についても武家の奉納したものが主であるが、ときには庶民等の奉納したものもある。また当社には、これらの人々が奉納した刀剣に奉獻状や寄進文を記した鞘・納

入箱なども付属し、それらによれば中世から近世において天皇家をはじめ公家・武家から職人・商人にいたるまで広く信仰をあつめたことが知られる。厳島信仰が、これらの刀剣類の奉納をもたらしたものと見えよう。近年、さいわいにも厳島神社所蔵刀剣と当社の棚守職を代々務められた野坂家に伝わる古文書を調査する機会を与えられたので、この纏めの一環として寄進文書を中心に資料紹介をかねながら、各時代における寄進者の趣旨、性格等を分類から寄進の動機を探り、併せて各々の身分や居住地なども明確にしたいと思う。

(二)

厳島神社には、現存刀二〇〇口と明治二十四年宝蔵より出火して罹災にかかった焼身刀六〇口とが保存されている。現存刀は一部に、中世の公家や武家の間で流行した「木地螺鈿細太刀拵」・「兵庫鎖太刀拵」・「革包太刀拵」・「腰刀拵」をはじめ、近世大名が佩用した「打刀拵」・「糸巻太刀拵」などを付属しているものもあって、当社には日本刀剣外装のほとんどの種類がそろい、しかも各種共それぞれ代表作で占められている。焼身となつている刀剣も、逸早く保存手入

が行なわれたので大半が茎に刻まれた銘文を判読することができ
る。しかし、焼身刀が火事跡から総て残らずに寄せ集められたかは
定かでない。

現存刀・焼身刀を合せて二六〇口の奉納刀は、当社の長い歴史の
上から見たばあい、やや少量のような感じがする。幾ら少なく見積
もっても、この数倍はあつたように思われる。そこで、なぜ少なく
なつたのかその理由が二・三考えられるので挙げてみよう。一つは、
弘治元年（一五五五）の「嚴島の合戦」で、多くの刀劍が兵士によ
つて持ち出され、戦に使われたのではないかと想像される。二つは、
当社が過去に於いてたびたび宝物の盗難が発生しており、その被害
も少なからずあつたようである。例えば、『棚守房頭覚書』のなかに
彼ノ宝蔵ヲ、明応年中ノ事ヤラン、予州イマハリノマトバト云
ウ海賊、十月廿日ノ夜、板敷ヲ焼キ貫キ、昔ヨリノ太刀、刀ヲ
トル、小松殿ノヨロイヲモトリシテ、河野殿ニトラヘラレ、返
サレケル、カイラゲ丸サヤノ太刀ドモ、道具ノ無キハ、何レモ
当社ノタタリアツテ返ス、寄進ノ物ナリ
と書かれている。また、これは刀劍ではないが、宝物の盗まれた古
い史料としてあげると、『野坂家文書』には

注進

熊野三郎焼破宝蔵盗取色々宝物事

建長二年八月二日辰時見付之

合

一、一品経三十二卷内

盗取分 十六卷

残十六卷

此外御箱饒伏輪等少々失之

一、金泥法花経箱破蓋之

一、七宝塔饒取之

一、田楽装束 八具

失物

水干三具 赤衣二、指貫七具

残分

水干五具 赤衣六具 指貫一

一、ヒハノ袋取之 鍾湯口二、取之

とあつて、すでに七百年も前に平家納経十六巻と什物が盗まれてい
たことが知られる。幸いに、この二つの事件は侵入した盗賊が捕え
られて無事に元へ戻つたようであるが、こうした盗難によつて無く
なつた刀劍の数量は意外と大きかつたと思われる。三つは、古くよ
り寄進されている刀劍のなかに、少なからずも幾らかの名だたるも
のも含まれていたので、当時の権力者らは贈答・蒐集などに用いる
べく、その中から優れた名刀を所望して流出となつた例もある。『野
坂家文書』の天正十一年五月廿日の条に

是より先、毛利輝元、安芸嚴島社をして羽柴秀吉に贈る太刀を
出さしむ、是日、之を謝して地を寄す。

とある。また、『嚴島図会』の中にも

大内家重代ノ宝劍二千鳥・荒波・乱髪・菊作・小林トテ五口ア
リケリ、山口滅亡ノ時吉田ヘオクリシカバ毛利隆元コレヲ見タ
マヒ、予ハ義隆ノ扶持ヲ以テヒト、ナレ、バカノ家ノ宝物ミダ
リニ取ヲサムベキニアラズ、シカシ大明神ニアズケマイラセン
ニハトテ当社ヘ納メタマヒケリ、然ルニ足利將軍家、荒波・乱

髪ノ名剣ナルヨシヲ伝ヘキコシメサレヒタスヲ御覽アリタキヨ
 シニテ御使類ニアリケレバ、棚守房頭ヲ吉田ヘメサレソノヨシ
 仰セラレケル、房頭マウシクルハ平家ノ御時ノコトハ申ニオヨ
 バズ頼朝以来ノ御代々々ニハ將軍家ヨリ銘物ノ御太刀、刀御寄
 進コソサフラヘ宝物御所望ノ刀ハ神慮イトモカシコシ更ニカナ
 ヒサフラフマジト申上、シカドモナホ御覽セマホシキヨシニテ
 上野兵部大輔吉田ヘ下向アリコノウヘハチカラナシトテ荒波・
 乱髪ノ二口ヲ都ニ上セタマヒケルニ乱髪ヲハカヘシタマヒテ荒
 波ヲト、メタマヒケリ、……荒波ハサラニモイハズ千鳥・小林・
 菊作ノ三口モイマ宝庫ニ見エサルハイツウセタルニカ惜ムヘキ
 ノキハマリナリケリ

と記されている。このように長いあいだ大切に取り扱われてきた当
 社の名高い刀が、次々と失われていく状況が目にあたりに見ること
 ができる。また、こうして手放された刀剣については現在に至って
 も行方がわからず、今日では前掲史料の記載によって、その存在が
 知られるのみである。四つは、火災によって多くの刀剣が焼失した
 ことも充分に考えられる。前述した明治二十四年の火災は別として、
 当社は過去に三度の大火に見舞われている。『厳島文書』によれば、
 承元元年（一二〇七）七月三日と貞応二年（一二二三）十二月二日
 に、それぞれ炎上している事が知られる。どちらも原因は明らかで
 ないが、この火事で創祀以来の荘厳華麗な建物が殆ど全焼している。
 とくに後者の禍災ではかなりの調度品が亡失したようである。同文
 書の中に、嘉禎二年（一二三六）と翌三年三月とに田楽装束・隨身
 装束をはじめ舞楽装束・楽器など多くの神宝類の調進が新しく行な
 われている。さらに同年八月十七日には、再建工事のため鋳物師の

津関料を免ずるような処置もとっている。これらを合せて考えれば、
 この火災でも刀剣を含む多数の宝物が焼失したことが、うかがえよ
 う。貞応二年から半世紀後の文永七年正月二日に、再び神社が炎上
 している。『一代要記』には、その状況を次のように記している。

正月二日、寅刻、安芸齋島社壇悉以失了、往昔以来、未_レ有_二此
 災_一、人皆謂神火、可_レ驚可_レ快

とあって、火災が非常に大きかったことを示し、同時に人々はこれ
 を神火として恐れていた様子が窺える。この火事に関する史料はこ
 れ以外に見当たらないが、ここでも矢張り何らかの宝物が多く罹災に
 あつたと思われる。

以上のごとく当社に当然あるべき多くの刀剣が、このような手だ
 てによって減つていったことを否定することは出来ない。また減少
 に結びつくような史料を取り上げて考察したが、この他にもさまざま
 まの方法によって無くなつていったものもあるう。

焼身刀	現存刀	数量	
		種類	
16	66	太 刀	
17	44	刀	
20	36	脇 指	
7	34	短 刀	
0	12	槍	
0	8	薙 刀	
60	200	計	

表(I)

表(II)

計	西海道					南海道	山陰道	山陽道					北陸道			東山道		東海道			畿内		国別			
	薩摩	日向	肥後	肥前	豊前	筑前	土佐	石見	周防	安芸	備後	備中	備前	播磨	越中	若狭	陸奥	磐城	美濃	相模	三河	伊勢	摂津	大和	山城	時代別
3												3														平安
20			1		1				2		3	8							1						3	鎌倉
3 (2)											1	1							(1)						1 (1)	南北朝
23 (19)							2					4		2					2	2		2	2	2	7	室町
3 (1)										1					1										1	桃山
18 (10)	1 (1)		1 (1)	1 (1)			2		5 (3)	2 (1)			1 (1)		1	1			1 (1)	1 (1)		1		1	1	江戸
70 (32)	1 (1)	1	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1	2	2	2	6 (3)	3 (5)	4	15 (7)	1 (1)	2	2	1		3 (4)	3	1	2	1	2	13 (1)	合計

()内は焼身刀

(三)

現存刀と焼身刀を種類別に整理すると表(I)のようになる。

さらに現存刀と焼身刀の中から作者銘の判るものを抽出して、その刀工を地域別に分類し、併せて製作年代を一覧表にしてみた。

この表(II)でみられるように、現存刀・焼身刀を合せると大半が平安末期から室町時代に至る古刀期の作刀でしめられていることがわかる。また、そのうち半ば近くが山城・備前をはじめ各地の刀工の在銘作であることも知られる。このように伝えられた数多くの刀剣類は、八百有余年にわたる厳島神社の長い歴史の上で漸次集まったものである。そこで、これらの刀剣がいつ頃から当社にもたらされるようになったのか、その段階を大まかに掻い摘んで述べてみたい。

中世では後白河院の行幸を初め高倉院の御参詣などが諸文献に散見され、篤い尊崇を受けていたことが知られる。また、その機会に種々の神器類も奉納されていたことが、『芸藩通志』などに載っている。神器の内容については詳しく書かれていないので、その中に刀剣が含まれていたかどうかは明らかでない。しかし、厳島神社々史によると「承安三年四月二日に後白河法皇御寄進と称する太刀が宝庫に在り」と記載されている。ただし其の太刀は現在みつからないが、これは恐らく先述の行幸の時に天皇家より寄進された神器の中に含まれていたことは十分に推察することができよう。次に厳島神社を平家の氏神として信仰した平清盛も、再度にわたって参詣し、そのつど社殿の造営や修理などに財的援助を惜しまずにつぎ込んでいた。さらに長寛二年(一一六四)には、平家一門の繁栄は日ごろ崇

敬している厳島神社の加護によるもので、その報賽のために一門の者三十二人が各巻を書写した経巻に清盛もみずから願文を添えて奉納している。現在、それが平家納経と呼ばれているもので、そのみごときは同類の装飾経中で最もすぐれていることは、すでに周知のとおりである。このように平氏の氏神となつてからは、ますます一族家門などが競つて神明の加護を懇祈したことが想像され、神前には多くの奉納物があつたことと思われる。そのことを物語るものに、舞楽面と友成作の太刀がある。面は「咲面」「腫面」など九面で、裏側に「厳島社二舞面 承安三年八月日 盛国朝臣調進」などの銘文が記されている。太刀の方も鍛えた刀身の肌が板目になり、刃文も小模様のみだれ刃を焼くなど作風に古調が見受けられる。造り込みも手元で浅く反り、鋒にかけて真つすぐにのびた優美な形姿に平安後期の備前刀の特色を強く示し、莖には「友成作」と大振りの三字銘をきる。ともに『厳島図会』の中に掲載されているが、とくに友成は実物大で描かれ、その横に「平宗盛公太刀」と記してある。これなどは、その際に奉納されたものでないかと考えられる。

こうした奉納が前例となり、平氏滅亡後も鎌倉将軍源頼経や足利将軍義満などが厳島社に参詣した折には、必ず宝物を奉納していることが『厳島文書』と『鹿苑院殿厳島参詣記』に見受けられる。今も其の時に奉納された兵庫鎖太刀や梨地桐文螺鈿腰刀が伝えられている。中世末期から近世にかけても、水軍の神・海路の守護神として神威を高めたので、瀬戸内の大名はもちろん、広く武家や一般庶民にいたるまで上下の崇敬を集めた。この信仰心が、かかる種々の名品の奉納をよんだといえよう。

(四)

奉納者が刀剣を納める際には、なんらかの事務手続を必要としたようである。現在では社務を司る人にも詳しい様式などが受け継がれていないので、はつきりした事は分からない。しかし、『棚守房頭覚書』によれば

宝蔵ノ太刀、刀、具足、何ナリトモ奉納ノトキワ、ヒザツキ膝突錢

三貫三百文ヲ、座主、棚守、政所代ノ三人ニテ、百足宛、三百文事ハ棚守ガ沙汰人ニ承ケサセ、地下ニ散仕シ遺ハスナリ、

とあり、すでに室町時代には刀剣・甲冑など奉納する時に、奉納者から礼物として金銭を徴収していたことを記述している。次に奉納後の刀剣について神社側の処理としては、『棚守房頭覚書』に次のごとく見える。

吉平ノ刀ハ上ヨリ寄進、国吉ノ刀ナシ、和殿ノ丸貫サヤノ脇差ハ、井原ノ彈正忠ノ奉納ナリ、目録宝蔵ニアリ

とある。また『厳島図会』の中にある松扇の解説欄にも

宝物目録寄附ノ人ヲ註サズ故ニ今詳ナラサレドモ凡ハ六七百年以前ノモノナルベシ、目録宝蔵ニアリ、

と見える。このように古くから総ての奉納品には、一つずつ品目や奉納者の氏名など特徴となる事がらを簡単に書きとめた目録が作成されてあつたことが知られる。しかも、その目録は宝物と同様に宝蔵で大切に保管されていたことも判明した。しかし、そこにあつた目録も厳島図会が刊行された天保六年（一八三五）頃まで存在していたことが確認されるが、その後は行方不明である。恐らく明治の

火災で、刀剣などと一緒に焼失したものと思われる。

奉納刀を通観すれば、そこには品目・趣意などが寄進者によって書き入れられている場合が多い。これは神仏に諸種の財物を奉納して、その功德を願う時に記入する文で、寄進文または奉納願文とも呼ばれている。現存する刀剣の中には、こうした寄進文を全く書かれていないのも一部あり、また反対に趣旨や奉納者名などを詳しく記入した奉献状のみ残って、それに付合する刀剣が残存しないという例もある。これについては、長い歲月の間にはどちらかが焼失や紛失によって無くなったものと見てよいであろう。

今、刀剣にみられる寄進文書等は、次のような方法で記されてある。

- (一) 奉献状・寄進状を作成
- (二) 刀身茎へ刻銘
- (三) 納入箱の蓋・底などへ墨書
- (四) 刀剣の鞘に墨書
- (五) 厳島図会記載

以上のように取り上げた各々の箇所には奉納者名や願意などが書きつけてある。そこで、それぞれの箇所に記載されてある内容を検討することによって、どういう人々が如何なる祈願をこめて奉納したのかを具体的に知ることができる。それで上記の条項にしたがって、年代順に整理して表にすると左の通りになる。

(一) 奉献状・寄進状

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
寛元三年二月廿九日	仁治四年二月廿三日	仁治三年二月廿八日	〃	仁治元年十一月二日	延応二年五月十一日	延応元年二月廿日	治承四年四月廿七日	承安四年三月廿七日	承安四年三月廿六日
一一四五	一一四三	一一四二	〃	一一四〇	一一四〇	一一三九	一一八〇	一一七四	一一七四
御劔老腰丸鞘文鶴	御劔老腰丸鞘文鶴	御劔老腰丸鞘文鶴	〃	御劔老腰文鶴丸	御劔老丸鞘	御劔老腰獅子牡丹	御劔	胡鍊劔 皆金銅	蒔絵御太刀 二腰
天下泰平 国土豊稔 息災延命	天下泰平 国土豊稔 息災延命	天下泰平 国土豊稔 息災延命	天地地久 国土安穩 息災延命 福寿	天長地久 国土安穩 息災延命 増長福寿	天下泰平 国土豊稔 殊御息災 延命宝寿	天下泰平 国土豊稔 息災延命	天下泰平 国土豊稔 息災延命	院御方 女院御方 太政入道	院御方 女院御方 太政入道
前筑前守藤原朝臣(花押)	左衛門少尉藤原(花押)	左衛門少尉藤原(花押)	征夷大将軍 前大納言藤原朝臣頼経	征夷大将軍 前大納言藤原朝臣頼経	征夷大将軍 前大納言藤原朝臣頼経	令左衛門少尉藤原行綱	令左衛門少尉藤原行綱	伊都岐嶋社	伊都岐嶋社
(前権大納言家政所)	(將軍家政所)	(將軍家政所)	〃	〃	〃	伊都岐嶋社	伊都岐嶋社	伊都岐嶋社	伊都岐嶋社
奉献	奉献	奉献	〃	奉献	奉献	奉献	奉献	奉納	奉納
Z a	Z a	Z a	Z xa	C	C	Z a	Z x	Z x	Z x

御判物帖A・厳島旧記(乾) B
棚守家旧記C・寄進に関する文書Z

*Z|x寄進に関する文書の内、朱筆で「芸藩通志」とある。
Z|a寄進に関する文書の内、朱筆で「御判物帖写」とある。

⑪	寛元 三年十一月十三日	一二四五	劔一腰 金銅金物白鑊□文□者		出納左衛門少志安倍親清 (勅使陰孫正六位上) (中原朝臣俊繼)	(藏人所)(安芸 国伊都岐社)	奉送	Z
⑫	建長 七年十一月十八日	一二五五	劔一腰	(謹請 御神宝事)		伊都伎嶋社	奉送	Z
⑬	文永十一年十二月二日	一二七四	長伏輪獅子牡丹 御劔老腰	異国征伐御祈	親定	嚴島社政所	御宝前	Z
⑭	正応 六年 二月十一日	一二九三	御劔老腰	異国降伏御祈	陸奥守 相模守	(備前守)	奉献	A
⑮	正応 六年 三月 廿日	一二九三	御劔	異国降伏御祈	相模守		献	B
⑯	正応 六年 卯月十六日	一二九三	御劔老腰 牡丹作	異国降伏御祈	御使右近将監藤原基有	(嚴島社)	(奉献)	ZZA
⑰	正応 六年 四月廿一日	一二九三	御劔一腰	異国降伏御祈	(御判)	(長居兵衛五郎) (安芸国一宮)	奉献	ZCA
⑱	五月 五日		御劔一腰	異国降伏御祈	(平正信)	一宮神主代	送進	ZA
⑲	応永十八年十二月十三日	一四一一	御太刀	天長地久 所領函備 かの孫繁昌	安芸守親弘	嚴島大明神	奉寄進	ZC
⑳	文明 七年 八月 六日	一四七五	刀一腰 友成	無病安穩 息災延命 家門泰平 子孫繁昌	神主藤原長膳丸掃部頭	嚴島大明神御宝	奉寄進	C
㉑	長享 二稔 八月廿日	一四八八	刀一腰 銘宗近	一家安全 門葉繁昌 心中所願 如意満足 殊者当陣頓得利理早速開陣	教親	嚴島御宝殿	奉籠	ZC
㉒	大永 四年 五月廿三日	一五二四	御劔一腰		從三位行左京大夫 多々良朝臣義興	嚴島大明神御宝	奉寄進	ZBA
㉓	大永 五年 七月 七日	一五二五	太刀一腰 長光		從三位行左京大夫 多々良朝臣義興	嚴島大明神御宝	寄進	ZC
㉔	大永 六年 九月十三日	一五二六	御劔一腰		從三位行左京大夫 多々良朝臣義興	嚴島大明神御宝	奉寄進	ZC
㉕	天文 九年 八月 七日	一五四〇	太刀一腰		從四位下行大宰大式兼伊 予介多々良朝臣	嚴島大明神御宝	奉寄進	C
㉖	天文 十年 三月 五日	一五四一	太刀一腰		右と同じ	嚴島大明神御宝	奉寄進	C
㉗	天文十一年 四月廿六日	一五四二	太刀一腰		正五位下行左衛門佐兼同 防権介多々良朝臣	嚴島大明神御宝	奉寄進	C
㉘	天文十一年 五月 廿日	一五四二	太刀一腰 宗光		正四位下行大宰大式兼伊 予大掾多々良朝臣	嚴島大明神御宝	奉寄進	BA
㉙	天文十二年	一五四三	太刀一腰		從三位行(大宰大式兼伊 予介多々良朝臣)	嚴島大明神御宝	奉寄進	C
㉚	天文十三年 四月 七日	一五四四	太刀一腰		正三位行(大宰大式兼伊 予介多々良朝臣)	嚴島大明神御宝	奉寄進	C
㉛	天文十四年 正月十五日	一五四五	太刀一腰		右と同じ	嚴島大明神御宝	奉寄進	C

(二) 刀身茎の刻銘

西曆	品目	寄	進	文	奉納者	宛先	捧げ方	寄進の動機
③ 一六四四	刀	備前国長船春光作 永祿七年八月日	奉寄進願主矢田土佐守秀職		矢田秀職	奉寄進	奉寄進	
② 一六二八	刀	寬永五年正月吉日 奉寄進広島大明神	於播州姫路藤原勝吉作之 願主四位侍從兼美濃守朝臣忠政		本多忠政	奉寄進	奉寄進	
① 一五六四	刀	寬永廿一年八月吉日 葦州広島住冬広八兵衛尉作之 敵島大明神様寄進			刀工冬広	敵島大明神様	寄進	

④⑧ (欠)	八月十二日	白さや助國之刀			西尾平左衛門			Z
④⑦ 慶長五年七月十五日	一六〇〇	御腰物助実 御脇差長義			堅兵少	敵島御宝藏	寄進	Z
④⑥ 慶長三年六月廿三日	一五九八	出羽之御刀 長脇指			西緒兵衛尉	万年彦右衛門	寄進	Z
④⑤ 慶長二年三月廿九日	一五九七	御陣刀無銘 御脇差 無銘 御腰物光忠			井原大守	棚守左近衛將監 (御物 注文)	寄進	Z
④④ (欠)	七月七日	刀一腰 則國			吉川広家	大明神	寄進	Z
④③ (欠)	三月廿五日	御太刀式振	御祈念馮申候		堅兵少 元慶	棚守左近衛將監	入置進	Z
④② (欠)	十二月十三日	三原之刀			毛利秀元	大明神	奉納	Z
④① 天正廿年十二月十三日	一五九二	三原之御腰物	武運長久 諸卒安陰		桂源右衛門元盛伊藤安房 守清泰	敵島神社	奉納	Z
④⑩ 天正三年八月廿五日	一五七五	御腰物一腰 吉平			右馬頭大江輝元	敵島大明神	奉寄進	Z
④⑨ (欠)	十一月十九日	御太刀一腰	御祈念		柳沢新右衛門尉元政	大明神	寄進	Z
④⑧ (欠)	七月四日	打刀 三原	明神之擁護所		毛利元就	社之神庫	寄進	Z
④⑦ 永祿七年十一月九日	一五六四	太刀一振 劍来太郎國俊 弘安八年乙酉正月十五日	紛失之所を房頭求出奉玉納		從五位下行左衛門佐平 隆景	敵島大明神(靈 社之神庫)	寄進	Z
④⑥ 永祿六年八月十三日	一五六三	太刀 銘葵	一字之儀斟酌候		修理太夫棚守房頭	奉納籠	寄進	Z
④⑤ 天文廿二年閏正月十一日	一五五三	太刀一腰 金覆輪	御遷宮無事故成就候(中略) 表祝儀計候		毛利輝元	棚守左近衛將監 御宿所	寄進	C
④④ 天文廿二年二月廿日	一五五三	太刀一腰 金覆輪			毛利輝元	棚守左近衛將監 宿所	寄進	C
④③ 天文十五年七月七日	一五四六	太刀一腰	掃陣之時		右と同じ	敵島大明神	奉寄進	C
④② 天文廿二年閏正月十一日	一五五三	太刀一腰 脇差一ツ丸貫			毛利隆元	棚守左近衛將監 御宿所	寄進	A

④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
一六六〇	一六六四	一六六五	一六九二	一六九四	一七〇一	一七〇五	一七四四	一七六五	一八五二	一八六六	一八六七
太刀	刀	刀	太刀	刀	薙刀	脇指	刀	薙刀	刀	脇指	刀
三州高力住長吉作 万治三庚子年三月吉日 奉進納安芸國嚴島大明神御宝前 高力左近大夫平朝臣高長敬白	奉寄進嚴島大明神 寛文四辰年十二月吉日 芸州住善助兼則鍛之	奉納御太刀諸願成就祈所 芸州住半左衛門尉藤原兼先作 干時寛文五乙巳六月吉日	若狭國住宗長冬広作 寛文三癸卯歲五月日 奉寄進元禄五年二月日 広島住那波屋了閑	奉納芸州住源國佐作 元禄十七年甲申二月吉日 嚴島江渡作	奉寄進嚴島御宝前諸願成就祈所 元禄十三庚辰曆九月吉祥日 施主石陽之住則武氏郎尚敬白	芸州住源國佐 敬主西川平蔵藤原政英 宝永二乙酉正月吉日	延享元年甲子十二月吉日 大和守藤原忠行 願主豊後國鶴崎川合伊左衛門兼正 同所 川合八右衛門兼正	嚴島大明神 以神前水火 於大元木部屋谷漆新御劍 明和二年乙酉歲五月吉日 芸州住人源國佐作之	石見國鍋石住江尾兼紹作 嘉永五壬子年八月吉日 嚴島宮奉納焉 願主江尾兼參	芸州住森元三鬼丸広隆 嚴島以火神水造之 慶応二年九月日	應需宮崎國重造之 慶応三丁卯年二月日 日本横綱薩州力士陣幕久五郎通高
高力高長	刀工兼則	刀工兼先	那波屋了閑	刀工國佐	則武氏郎	西川政英	川合知尚 川合兼正	刀工國佐	江尾弘三郎	刀工広隆	力士 陣幕久五郎
嚴島大明神御宝前	嚴島大明神			嚴島御宝前				嚴島大明神	嚴島宮		
奉進納	奉寄進	奉納	奉寄進	奉納	奉寄進			奉納			
	諸願成就祈所			諸願成就祈所							

(三) 納入箱の墨書

①	②	③	④	⑤
一六七二	一六七八	一六八九	一七七二	一七八五
短刀	短刀	短刀	太刀	刀
奉納天國小脇差一腰 寛文十二年壬子三月吉辰日 願主松野半左衛門直良	奉納小脇差一腰綱広 木本庄助泰正 延宝六年戊午九月吉日	奉寄進嚴島大明神御宝前長谷部國信作小脇差一腰 元禄二年歲次己巳九月吉日 当島奉行松田嘉右衛門藤原方好	奉納御腰物銘國時折紙有当所東町住糸屋武右衛門武房 明和九年辰四月二十九日	刀三条長吉一腰 天明五己巳冬十一月吉日 添状有 奉納芸州足助久一郎正矩
松野直良	木本泰正	松田嘉右衛門	糸屋武右衛門	足助正矩
		嚴島大明神御宝前		
奉納	奉納	奉寄進	奉納	奉納
				寄進の動機

(四) 鞘の墨書

西曆	品目	寄進文	奉納者	宛先	捧げ方	寄進の動機
① 一七四五	太刀	奉獻雄劍備前国長光作 座主宥鏡 延享二乙丑年十二月吉日	大聖院 座主宥鏡		奉獻	
② 一七九七	脇指	奉納直井兼信脇差 本阿弥之下札拾五枚 寛政甲寅年十二月吉日 岡本和朝	岡本和朝		奉納	
③ 一八〇三	短刀	享和三年癸亥十一月吉日、長州秋住光井忠右衛門可宜敬白 九寸八步中心三寸八步 相州正宗作	光井可宜		奉納	
④ 一八三三	太刀	奉納吉光太刀 天保四癸巳年三月 長州海老名十左衛門義俊敬白	海老名義俊		奉納	
⑤ 一八三四	刀	天保五年甲午三月奉掲 嚴島社廣前 弘化三年丙午十月改納宝庫 廣島中川弥八橋政武	中川弥八	嚴島社廣前	奉掲	
⑥ 一八四一	刀	和泉守兼定作 天保十二年辛丑六月吉日 廣島八木齊助正鎮拜具	八木齊助		奉寄進	
⑦	槍	奉寄進辨慶大身之槍 願主廣島團栗屋	團栗屋		奉寄進	
⑧	刀	奉納大和保昌五郎 施主柄巻屋才兵衛 願主清市	柄巻屋才兵衛		奉寄進	
⑨	短刀	来国行作 願主清市	清市		奉寄進	

西曆	品目	寄進文	奉納者	宛先	捧げ方	寄進の動機
⑥ 一八〇一	短刀	奉納正宗差添一腰 当島願主茶屋清次 寛政十三辛酉歲正月三日 座主法有敬取次	茶屋清次		奉納	
⑦ 一八二〇	槍	奉納槍穗 肥後守藤原輝広作 文政三年庚辰九月吉日 御宝劍研師皆伝惣次郎宗次敬白	研師惣次郎		奉納	
⑧ 一八二五	短刀	嚴島御宝库奉納小脇差龍彫貫無銘上箱 文政八年乙酉六月吉祥日 西尾直香	西尾直香	嚴島御宝库	奉納	
⑨ 一八二九	刀	奉納御劍 嚴島社御広前磨上無銘左国弘 右者豊前国宇佐郡豊後国東郡海岸 為祈新地成就永久堅固移民安全五穀生殖神護而奉納之者也 文政十二巳丑年九月廿四日 塩谷大四郎藤原正義	塩谷大四郎	嚴島社御広前	奉納	為祈新地成就永久堅固 移民安全五穀生殖神護
⑩ 一八四八	刀	弘化五戊申年春三月穀且 細工町住村田八代目新五郎謹白 短刀無銘相州之住正広作一振 矢野万造 嘉永元戊申年六月穀且 願主広陵研屋町住矢野二代目万蔵敏次謹拜	村田新五郎 矢野万蔵		奉納	
⑪ 一八四八	短刀	嚴島宮奉納新刀一振 江尾弘三郎寄附 嘉永五壬子年十月吉日	江尾弘三郎	嚴島宮	奉納	
⑫ 一八五二	刀	奉納相州国広小脇差 信州松代代舊藩騎手笠原平六郎	笠原平六郎		奉納	
⑬	短刀	天国製劍一口 矢部圭庵正之蔵馬 取次小行事縫殿	矢部圭庵		奉納	
⑭	刀					

(五) 敵島図会記載

品目	作者銘	記載	文	奉納者	備考
① 太刀	友成作	平宗盛公太刀		平宗盛	国宝
② 太刀	備後国住人行吉作	能登守教経朝臣太刀		平教経	重要文化財
③ 太刀	兵庫鎖太刀(刀身無銘)	兵庫鎖ノ劔五腰ハミナ將軍家ヨリ奉納シタマヘル		藤原頼経他	重要文化財
④ 短刀	友成作	足利尊氏將軍短刀		足利尊氏	国宝 附梨地桐文螺鈿腰刀拵
⑤ 太刀	備中国青井助次助家作 貞和二年(以下不明)	棚守房頭寄附 助次助家兩作太刀		棚守房頭	重要文化財 付革包太刀拵
⑥ 太刀	一	毛利輝元卿寄附 銘一文字劔		毛利輝元	重要文化財 付黒添太刀拵
⑦ 太刀	長覆輪太刀(刀身無銘)	敵物作の劔一腰八將軍家ヨリ奉納		鎌倉將軍家	重要文化財
⑧ 太刀	若州住人冬広作	毛利元就卿大身槍		毛利元就	重要文化財
⑨ 太刀	久国	豊臣秀吉公劔 毛利輝元卿寄附		毛利輝元	重要文化財 附糸巻太刀拵
⑩ 太刀	光忠	豊臣秀吉公刀 毛利輝元卿寄附		毛利輝元	重要文化財 附打刀拵
⑪ 太刀	談議所西蓮	毛利輝元卿寄附 西蓮刀		毛利輝元	重要文化財 附打刀拵
⑫ 刀	源左衛門尉信国	毛利輝元卿寄附 地藏信国刀		毛利輝元	重要文化財
⑬ 刀	漆絵大小拵	毛利輝元卿寄附 陣刀		毛利輝元	重要文化財 刀身欠失
⑭ 太刀	国綱	毛利輝元卿寄附 国綱劔		毛利輝元	重要文化財 附糸巻太刀拵
⑮ 脇指	無銘	毛利隆元朝臣寄附 乱髪一文字		毛利隆元	重要文化財 附黒漆半太刀拵
⑯ 太刀	包次	吉川元長寄附 新髪切刀		吉川元長	重要文化財
⑰ 太刀	劍来太郎国俊 弘安八年乙酉正月十五日	小早川隆景卿寄附 国行国俊兩作太刀		小早川隆景	重要文化財 附革包太刀拵
⑱ 太刀	備州長船住国真	棚守房頭記日毛利殿当社御信心ノ事 前に隆元ヨリ稲光太刀奉納ナリ		毛利隆元	重要文化財
⑲ 太刀	信国	堅田兵部少輔寄附 劔		堅田兵部少輔	重要文化財 附野太刀拵
⑲ 太刀	吉光	堅田兵部少輔寄附 劔		堅田兵部少輔	
⑲ 太刀	清綱	桂下総介寄附 仁王清綱太刀		桂下総介	
⑲ 太刀	神息	佐世石見守寄附 神息短刀		佐世石見守	
⑲ 太刀	天国	松野半左衛門真良寄附 天国短刀		松野半左衛門	
⑲ 太刀	無銘	森河内槌太郎家来藤井徳左衛門 寄附正宗刀		藤井徳左衛門	

⑩ 太刀	筑前住川上興三兵衛寄進 銘一文字	川上興三兵衛	寄進
⑪ 太刀	清綱 井上伯耆守奉納	井上伯耆守	奉納

(五)

前掲の一覧表を通覧すると、中世では主として文書を作成して奉納するのが慣例のようになっていたことがうかがわれる。その文書は様式や文体もさまざまであって一様でなく、名称も内容とはかわりなく、文中に使われている言葉により、(一)④奉献状・②③寄進状・④奉納状などと呼ばれている。しかし近世初頭頃からは、これまで通例どうり紙に書かれていた奉献状などにかわって、(二)の刀身部分(三)、(四)のように鞘・箱などの器物へ直接書き込んで奉納されるようになった。この記入様式については、すでに他の社寺で二・三の古い作例を見つけているが、当社においては全く新しく出現したもので注目される。その後は、近世末期迄この方法が盛んに用いられた。次いで寄進の動機については、書き入れてないものが多いので個々の細かな糸口をとらえることは極めて困難である。しかし、僅かな例からも、奉納者は「成就」と「報謝」の二つを念願として、それぞれを神明に納受しようとしてゐることが覗える。趣旨についても、その目的によって意向が多少異なることもある。また、当時の社会情勢や奉納者の地位・職業などによって表わし方もかわってくる。例えば(一)④⑤⑥の奉献状に見られる「天下泰平」「国土豊稔」「息災延命」「増長福寿」「一家安全」などは、安泰興隆を目的としたものである。このような文意を書き表わす時は、世の中に戦乱がなく穏やかで、幸福を願う人々の気持ちをよくみとることができ。一方、(一)⑭⑮⑯の「異国降伏御祈」は再度による蒙古襲来で非常事態の国情下にあり、情勢がきびしくさしめまわっている感じが想像

される。また⑳「帰陣之時」㉑「武運長久」などは、武士として戦いの勝敗の運命を祈ったもので、そこには「武」に生きる力強い光景が見られる。このように事のおもむきを詳しく見れば、そこには極めて多様な意趣によって奉納されたことをうかがうことができる。奉納者の名前については、大半に記入されているので、どのような人物が刀剣を奉納したかが具体的に知ることができる。大別すれば天皇家・公家・武家・庶民が奉納したものがあるが、やはり武器としての性格から当然ながら武家の奉納したものが多い。

(I) 天皇家および公家の奉納者

表(一)に示したように天皇家では、①後白河法皇が承安四年三月廿六日に太刀二腰を奉納し、続いて翌日には、②建春門院も神剣を奉納している。『百鍊抄』承安四年三月十六日に「上皇。建春門院臨幸安芸嚴島」と見えるので、両院行幸の時に奉納されたものと推察される。③高倉院も奉納している。『高倉院嚴島御幸記』には「治承四年三月二十六日午刻宮島に着御……二夜三日御社籠」とある。しかし、文中には刀剣を奉納したような記述は見あたらないので、恐らく行幸の折に納められたものと見てよいであろう。④惟康親王の名も見られる。これは文永の役で蒙古軍降伏の戦勝祈願を神明に捧げ、自ら奉納したものである。親王は後深草天皇の兄宗尊親王の御子で、文永三年(一二六六)執権北条時宗が將軍宗尊親王を廃し、これに代って鎌倉幕府は惟康親王を將軍に奏請したので、暫くして征夷大將軍になった。このようにしてみると天皇家と嚴島社との繋がりが、いかに深かったかに、注目しておきたい。

(II) 武家の奉納者

武家では、(イ)將軍家、(ロ)執権・將軍家家宰、(ハ)守護、(ニ)大名、(ホ)

一般武士などに分けることができる。なかでも中世では、とくに鎌倉幕府にかかわりの深い人物が多い点に注目される。(イ)將軍家としては、(一)⑥・⑦征夷大將軍藤原頼経が見られる。頼経は鎌倉幕府の四代將軍として活躍していたが、寛元二年(一二四四)執權北条経時に迫られて將軍職を子頼嗣に譲り、翌年には出家して大殿と称した。しかし、建長三年(一二五一)僧了行と共に北条氏の排除を謀った理由でとがめを受け、不幸な境遇にしずんで歿した。この経歴でわかるように彼の晩年は悲惨な姿で終ったが、仁治元年(一二四〇)の奉納した当時は肩書きが示すように征夷大將軍として最も権勢をふるった頃であり、熱中するがごとく一途に嚴島崇敬の誠を捧げている。さらに寛元三年二月に再び御劔を奉獻しているが、この時は自ら出家をしなければならなかった運命をかかえ、あるいは北条経時の威圧を受けながら複雑な気持ちで社參となったと思われる。いずれにしても当時から嚴島神社は中央の為政者によつて厚い崇敬を受けていたことがわかり、また如何に御神威の高い社であったかを物語っている。(ロ)執權・將軍家宰としては、(一)⑭相模守平朝臣と陸奥守平朝臣の兩名がみられる。相模守は鎌倉幕府の九代執權となつた北条貞時である。陸奥守も北条一族で、連署として政務を総領した北条宣時(大仏)のことである。(一)④二階堂行綱、⑨清原満定などの名が見える。行綱は鎌倉幕府の政所執事で、満定は評定衆である。ともに幕府内部において要職につき、陰然たる勢力をふるつた。(イ)守護では、(一)⑳大内義興・㉑大内義隆が知られる。大内氏は周防・長門・安芸・石見・備後・筑前・豊前の七カ国を支配した守護大名である。義興は幕府の管領代となり、義隆も七カ国を兼領した有力な守護として知られている。(二)大名としては、

(一)⑳毛利元就・㉑毛利隆元・㉒・㉓毛利輝元など毛利一族の名が見える。元就は中国地方十カ国を領有する戦国大名であったが、輝元は関ヶ原の合戦で豊臣方の主將となつたので、敗戦後は周防・長門二国に削減された。そのほかに、(二)①矢田土佐守秀職、②本多忠政もみられる。矢田氏については『姓氏家系大辞典』によると永禄頃に因幡国荒神山城の城主が矢田七郎左衛門であったことを記している。さらに『大内系図』には、矢田太郎は大内弘貞の子と書かれてある。この二人の人物と矢田土佐守との関連は明らかでないが、先に述べたことと合せれば、大内氏の支配下に置かれて因幡地方の押えとして活躍した小大名であったと推考される。本多忠政は、播磨国姫路藩主である。小田原征伐に父忠勝と共に出陣し、大坂の陣では功をたてて十五万石の譜代大名となつたが、寛永八年(一六三三)二代將軍秀忠の病氣を聞いて参府を急ぐ途中、病をえて急死した。この刀劍は、彼が死去する三年前に奉納されたものである。(ロ)一般武士では、(一)④桂源右衛門元盛、④伊藤安房守清泰、④⑦堅田兵部少輔、④⑥万年彦右衛門、④⑧西尾平左衛門などがいる。桂元盛は芸州の豪族であったが、のち元利家の重臣となり芸州佐伯郡桜尾城を守つた。伊藤清泰については、『芸藩通志』によると先祖は天文十四年に大内義隆より佐伯郡上安村にて、三貫四百の地を賜う」とある。また『吉川記』には元就家臣と見られるところから、大内氏の滅亡後は毛利元就に仕えたことが知られる。その他は、どのような人物であったのか詳しいことはまだ判明していない。近世では、(三)①松野半左衛門直良・③松田嘉右衛門藤原方好などの名前が見られる。いずれも芸州広島藩士で、松田方好は宮島奉行を務めたことが知られているが、ほかは士分を明らかにすることはできない。ほ

かに、(三)―⑬笠原平六郎の名がみられる。彼は信州松代藩の騎手で、奉納者の中では最も遠い土地の人である。厳島詣は特殊な目的を兼ねたものではなく、恐らく厳島崇敬の厚い念から思い立って行なわれた旅行と考えられる。このように武士の奉納者を通覧すると中世末期では毛利家、近世に入ると浅野家の家士がとくに多くみられる。このことは、厳島神社が近くに在ったことと、さらに歴代藩主の熱心な信仰が反映したことも大きな要因と考えられる。

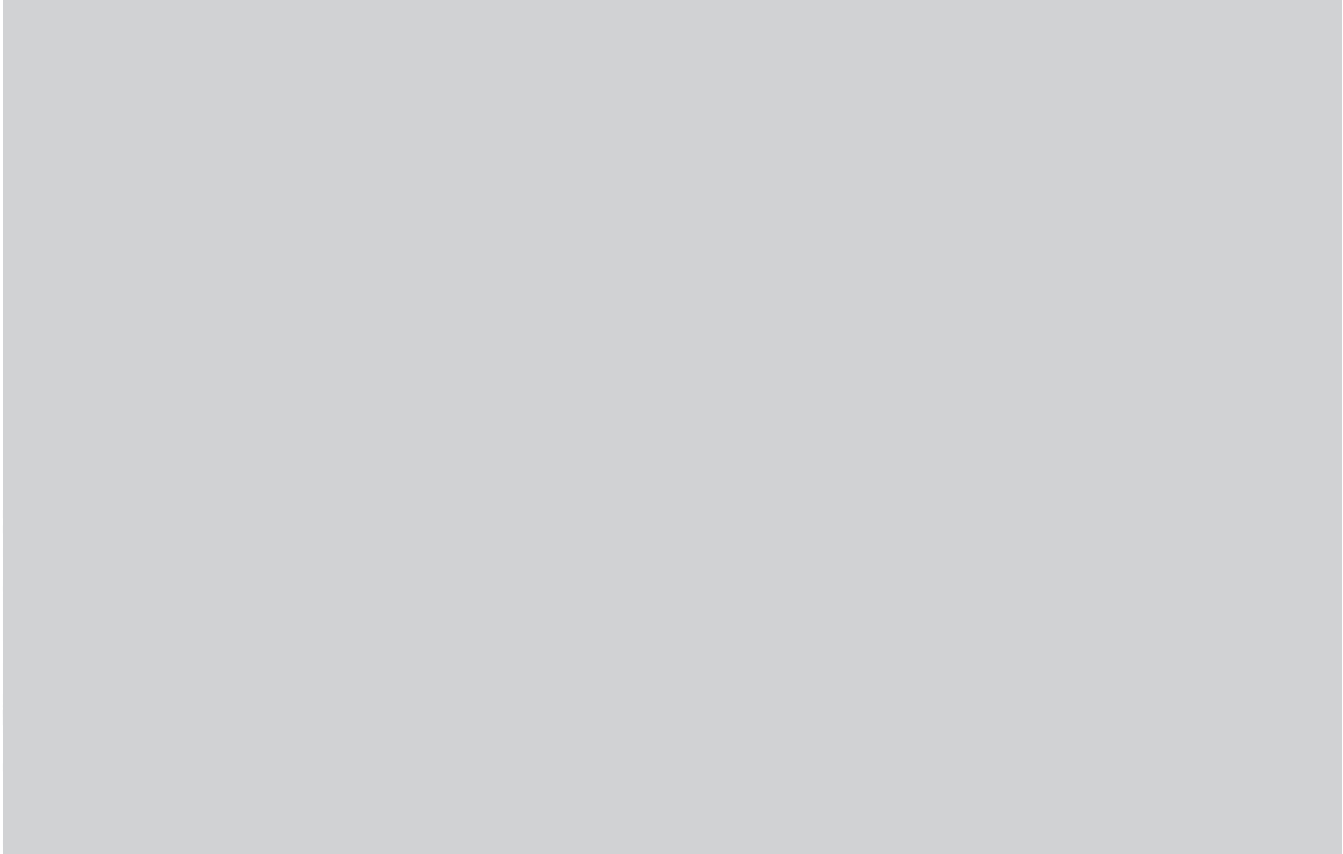
(四) 庶民の奉納者

庶民では、(イ)商人、(ロ)職人などに分けることができる。(イ)商人の中には、(一)―⑦那波屋了閑、(二)―④糸屋武右衛門・⑥茶屋清次、(四)―⑦団栗屋等あげられる。糸屋・柄巻屋・茶屋は、商売をしている家および名であつて、おのずから職業が知られるが、那波屋・団栗屋については屋号から推察すると宿屋でなかつたかと思われる。(ロ)職人では、(三)―⑦研師惣次郎は刀剣の研磨を家職としている。(三)―⑩村田八代目新五郎・⑪矢野二代目万蔵の二人は、細工町・広陵研屋町と職人集団を表わす居住地を明記しているので、何らかの物を製作することを職業としていた人物であろう。また(二)―③広島住冬広・⑤芸州住兼則・⑥芸州住兼先・⑧芸州住源国佐など、多くの刀鍛冶の名も見受けられる。いずれも十七世紀から十八世紀にかけて広島地方で活動した刀工達の奉納である。そのほか変つた人物としては、(二)―⑮陣幕久五郎通高がいる。彼は薩摩出身の力士で十二代横綱となり、四股名を陣幕と称した。幕末のころ故郷に錦を飾る途中、立寄つて奉納したものである。このように一般庶民の奉納者を通観すると大半が広島・宮島といった近在の商人と職人で占められ、そのうえ職種も多彩で興味深い。

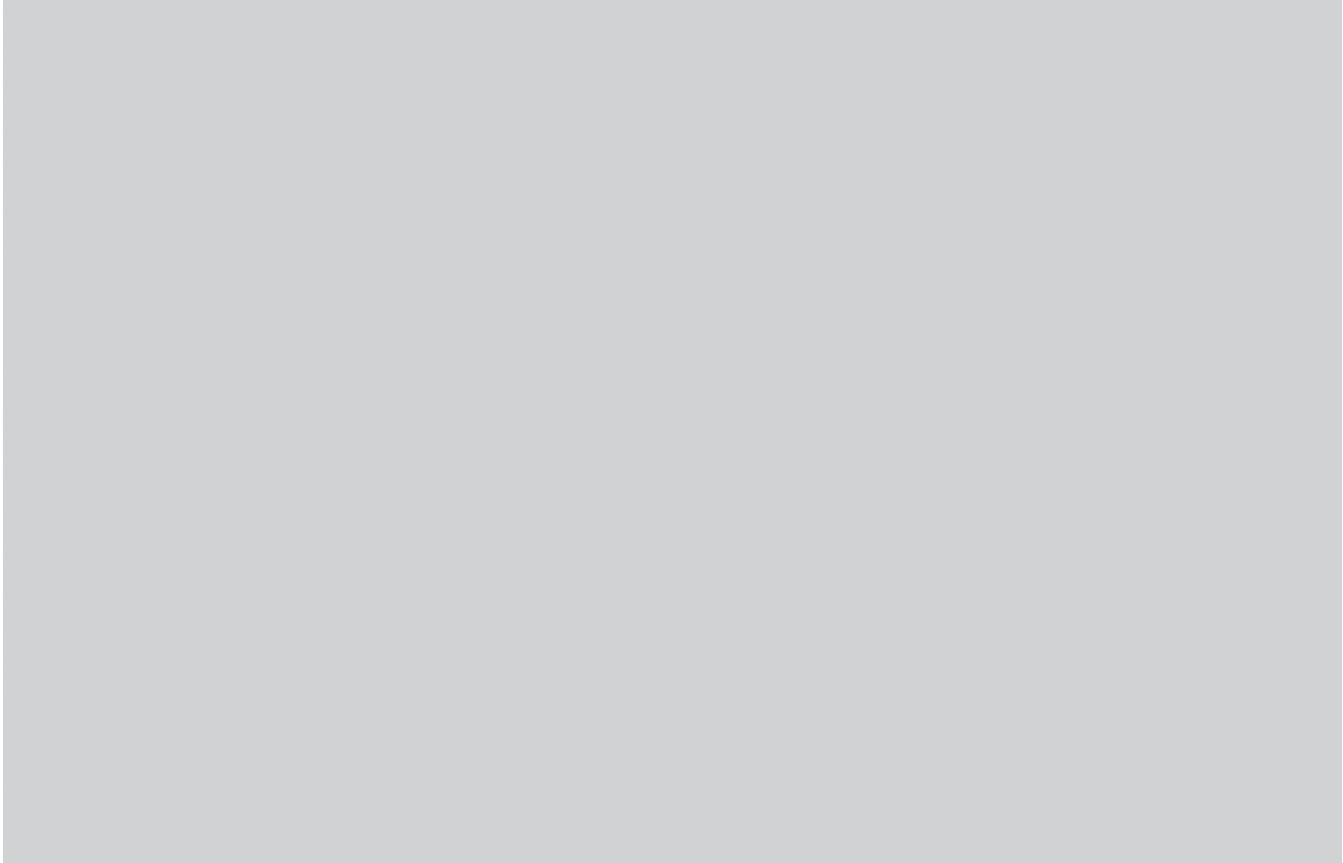
(六)

前述したごとく厳島神社所蔵刀剣の寄進文書について考察をしてきたが、その結果いくつかの問題点が残された。例えば奉納者の動機や階層などについては、いまひとつ明らかにすることが出来なかつたことも挙げられる。これらについては是非とも解明する必要がある。今後十分な検討を加えて明確にしたいと思う。また、他の面からみて幾らかの手がかりを得たものや明らかにされた問題もある。その一つには、奉納者が時代によつて変化を見せていることである。十二世紀後半は天皇家を中心とした特別階級者でしめられ、一般のものが奉納することは殆どなかつた。十三世紀になると武家政権が強くなり、鎌倉幕府の將軍を皮切りに、執権・三管四職・守護などの身分の高い武家が相ついで奉納した。十五世紀後半から十六世紀にかけては、中国地方を支配した大内義興、それに毛利元就などの戦国大名、更にそれへ近仕した武士が集中的に見られる。十七世紀から十九世紀を通してみると、これまでは武家の奉納が中心であつたものが、一般庶民にも奉納されるようになった。その年代は、元禄から文化・文政にかけて最も多く見受けられる。これは偶然にこの時代のものが残つたというよりも、むしろこの期間は政情が安定した平和な時世で庶民の厳島詣が流行した頃で、これらの奉納刀を見ることによつて当時の参詣がいかに盛況であつたか、その一端を偶ぶことができる。

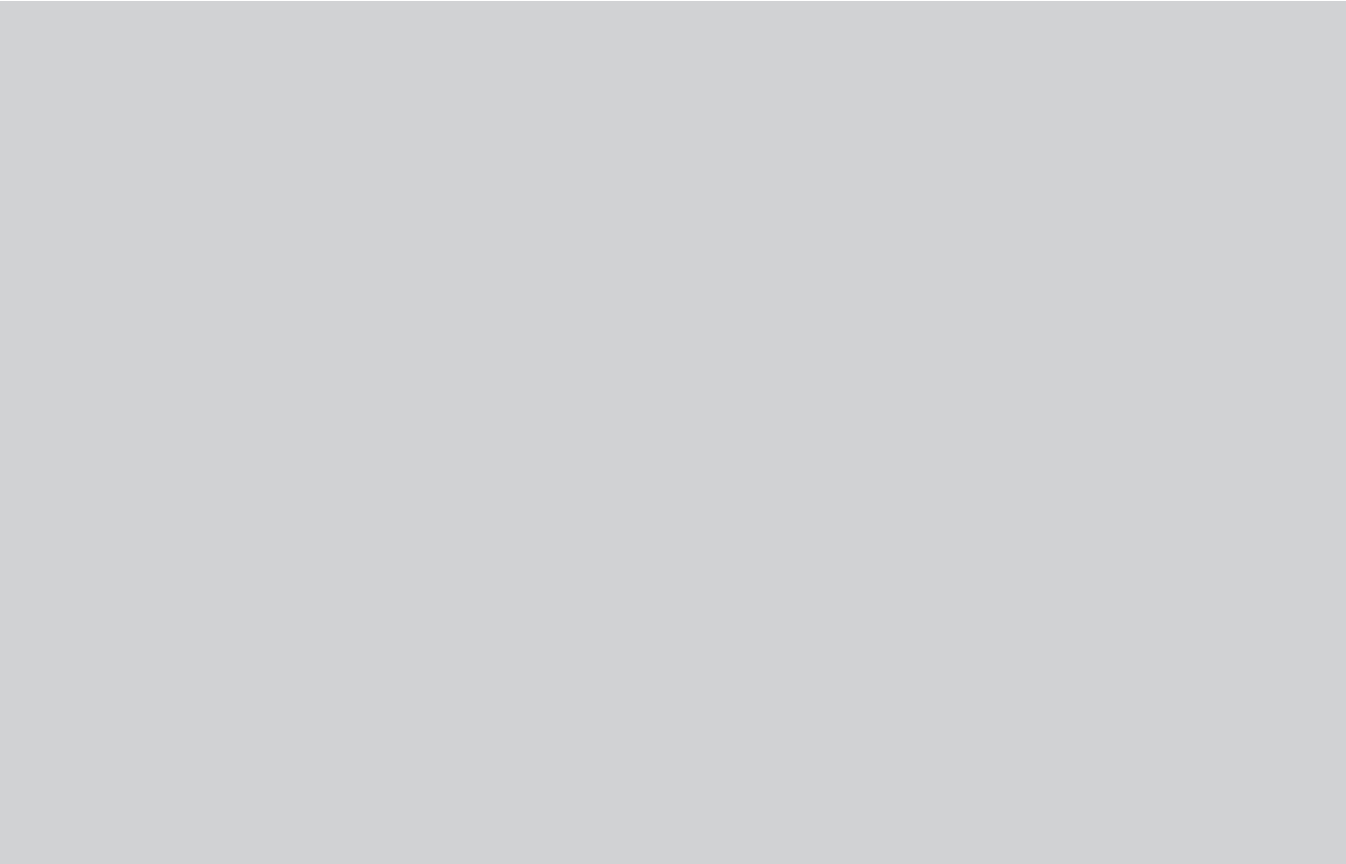
(執筆者 当館主任研究官)



(一)-④ 將軍家政所 奉獻狀



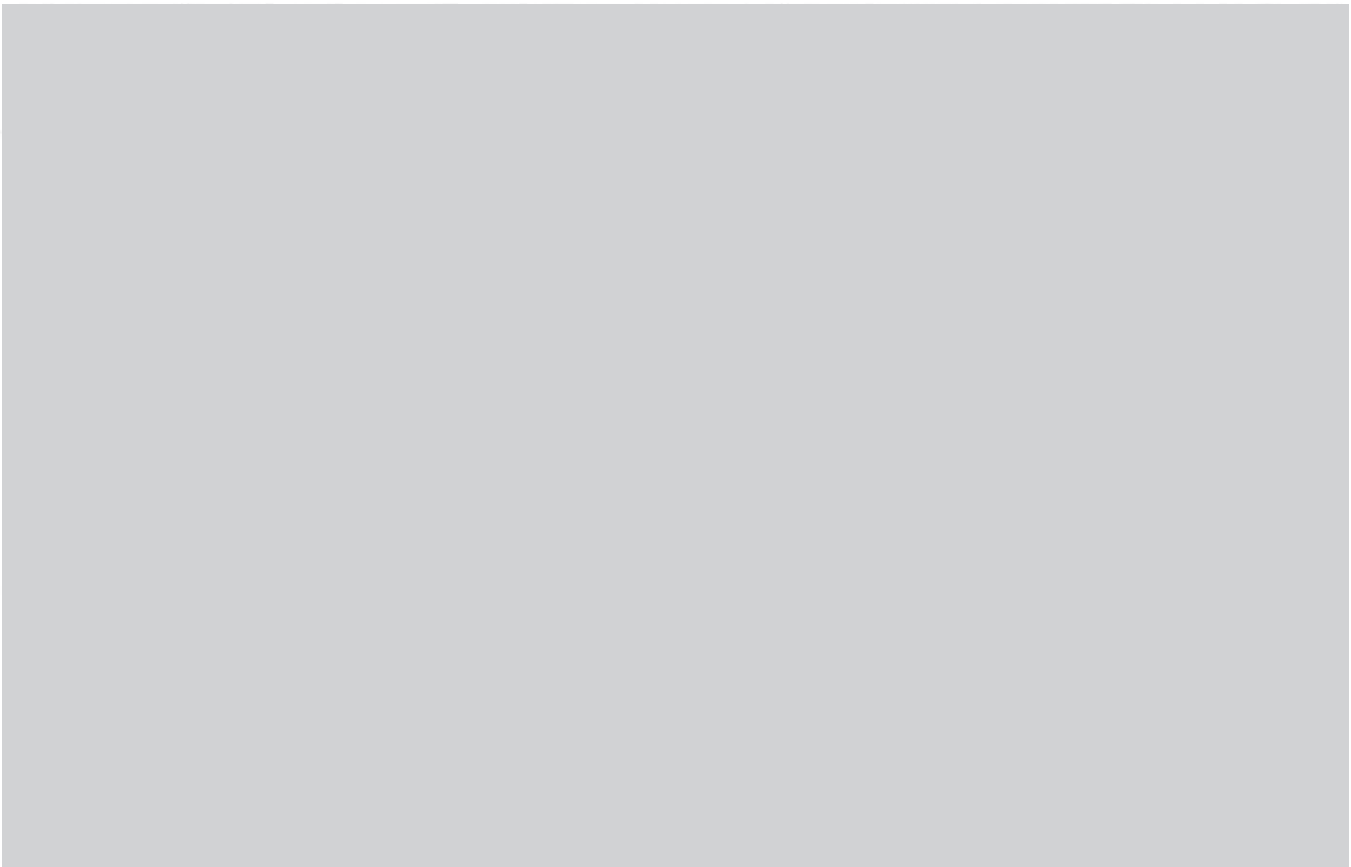
(一)-⑥ 將軍藤原賴經 奉獻狀



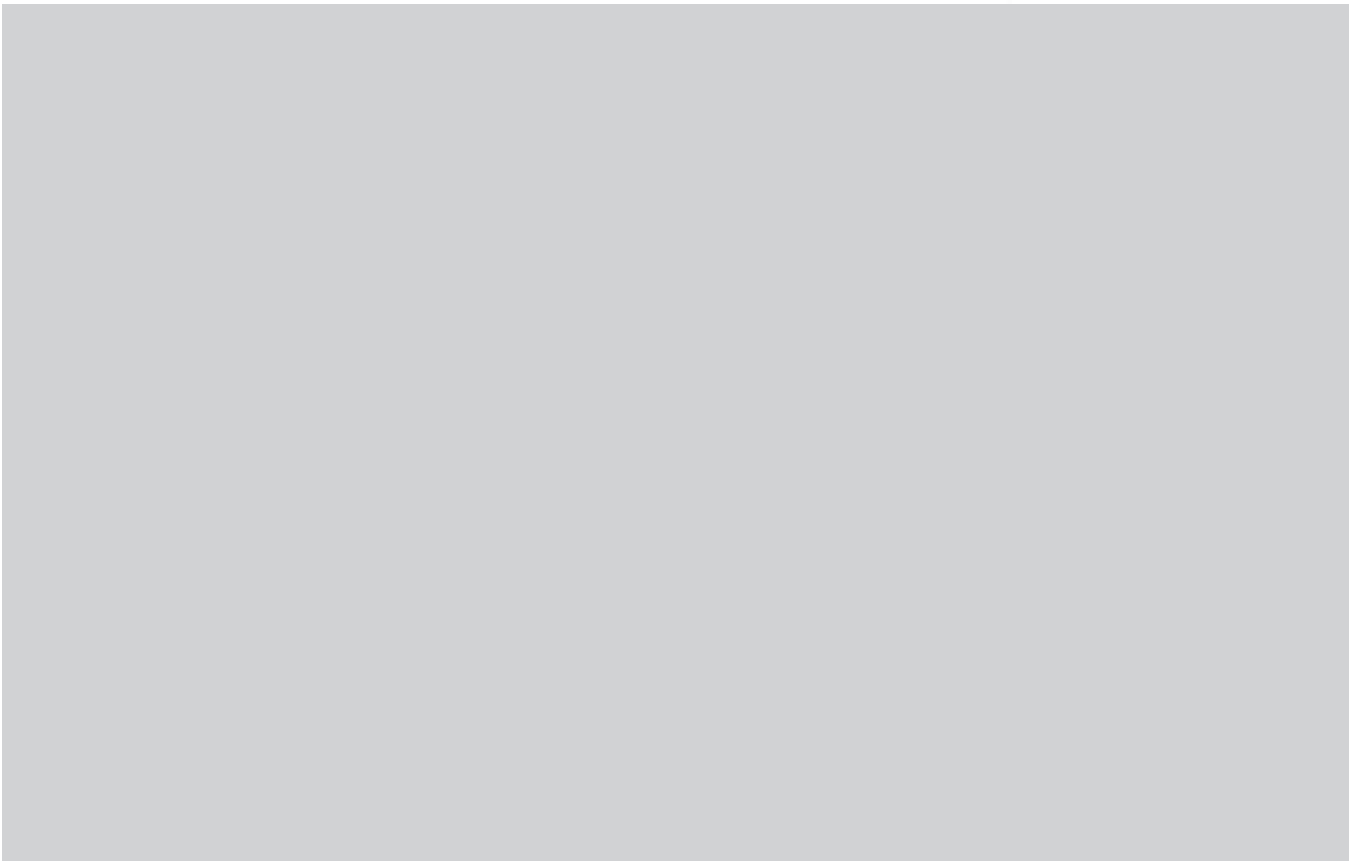
(一)-⑧ 將軍家政所 奉獻狀



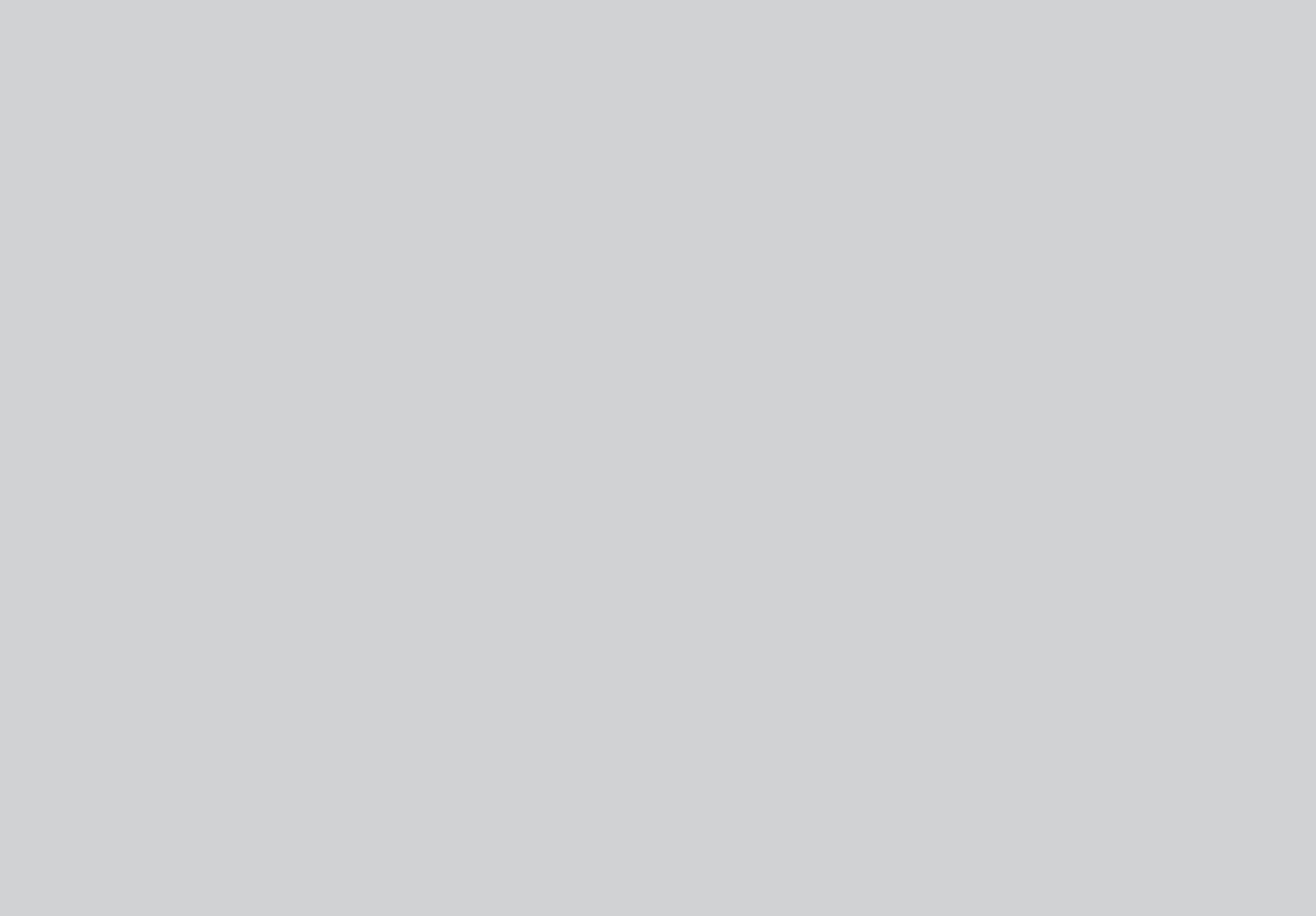
(一)-⑨ 將軍家政所 奉獻狀



(一)-⑩ 將軍藤原賴嗣 奉獻狀



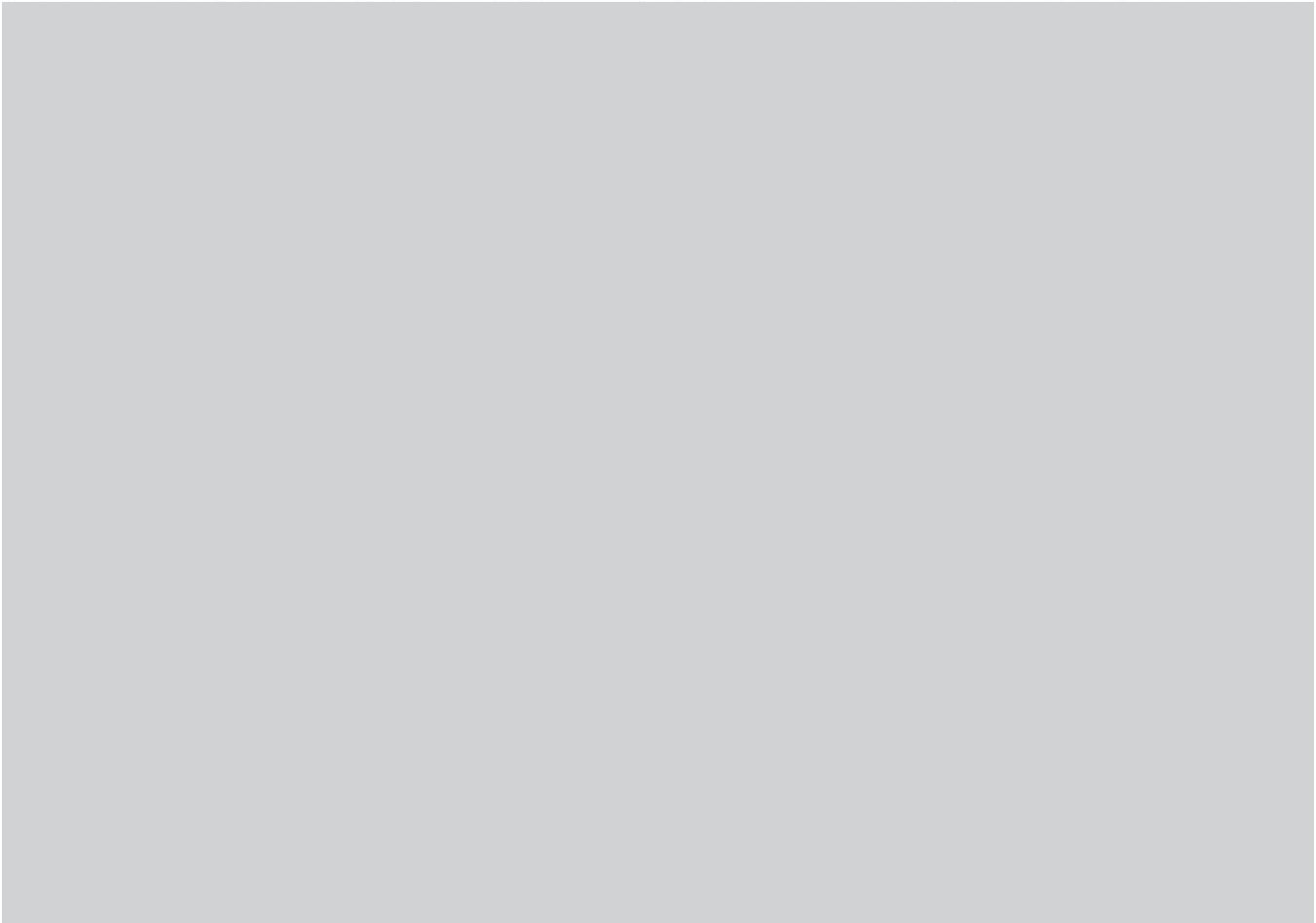
(一)-⑯ 巖島神社神物 奉獻狀



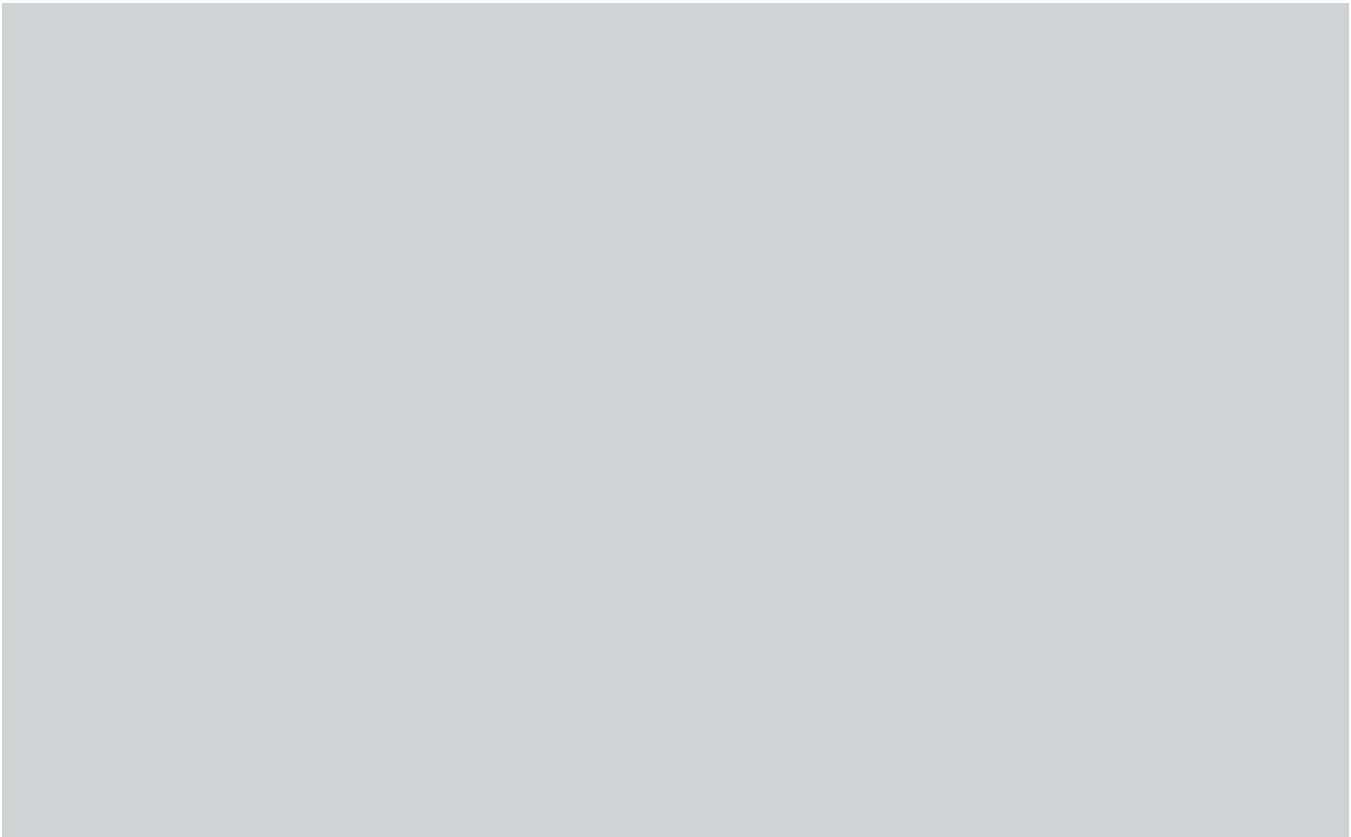
(一)-⑱ 関東御教書案



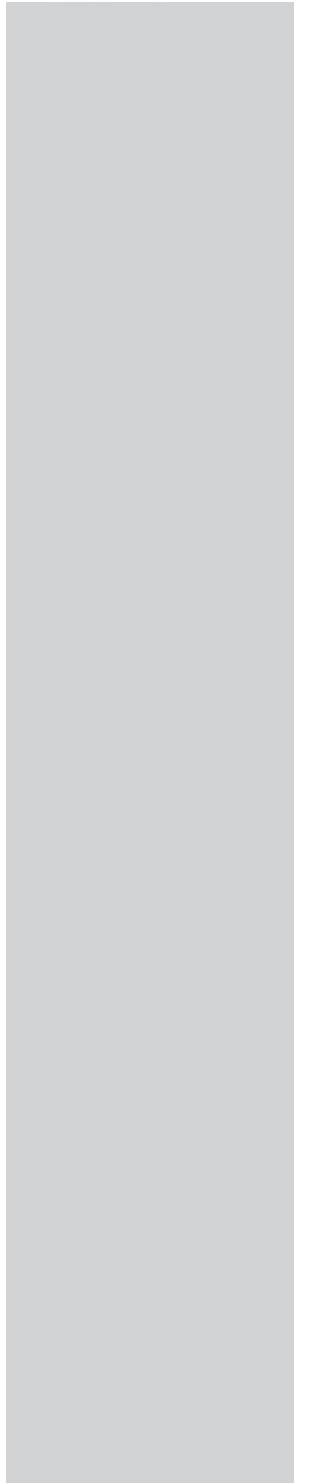
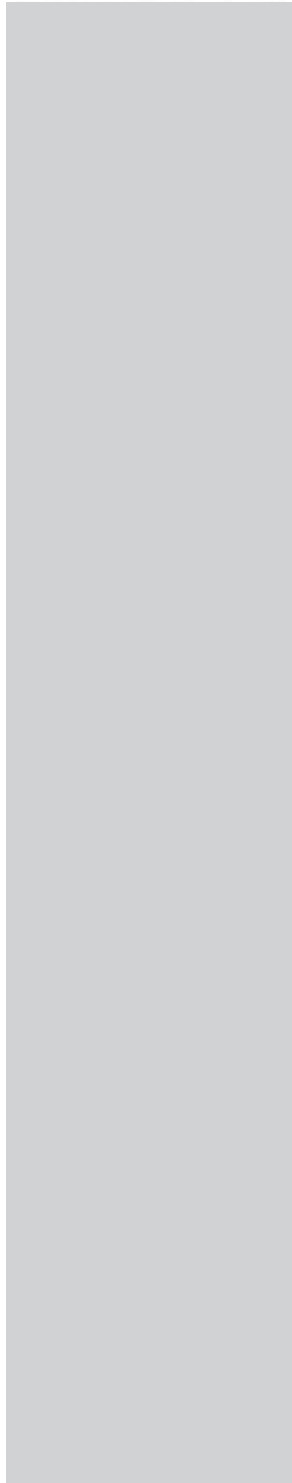
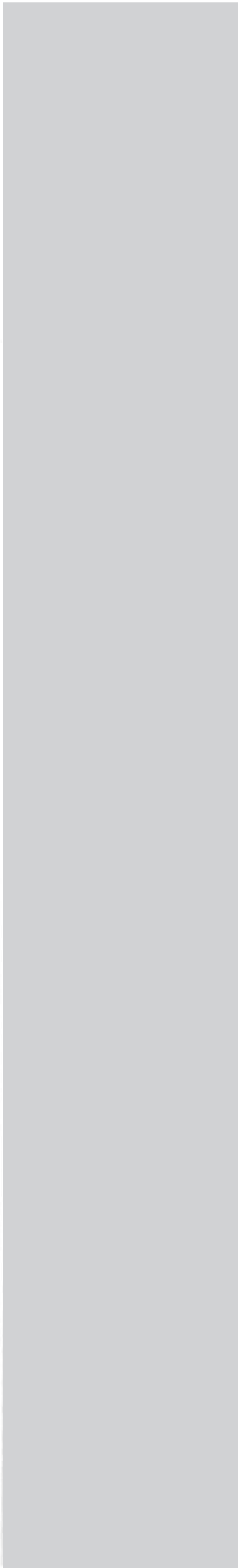
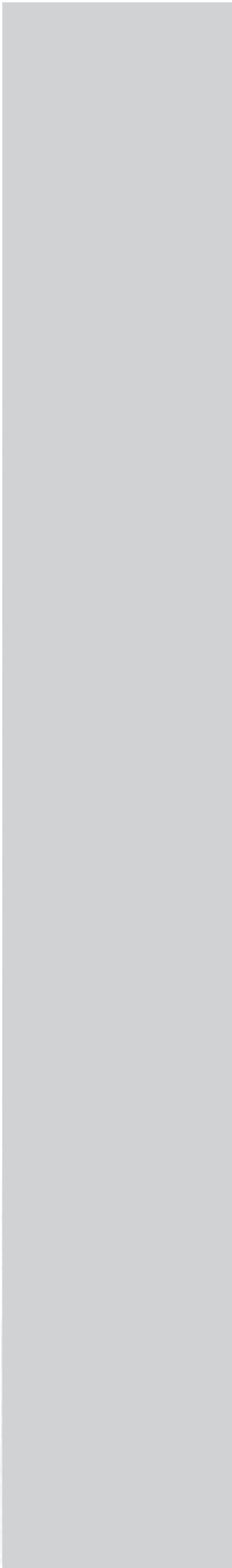
(一)-㉒ 大内義興 寄進状



(一)-㉘ 大内義隆 寄進状

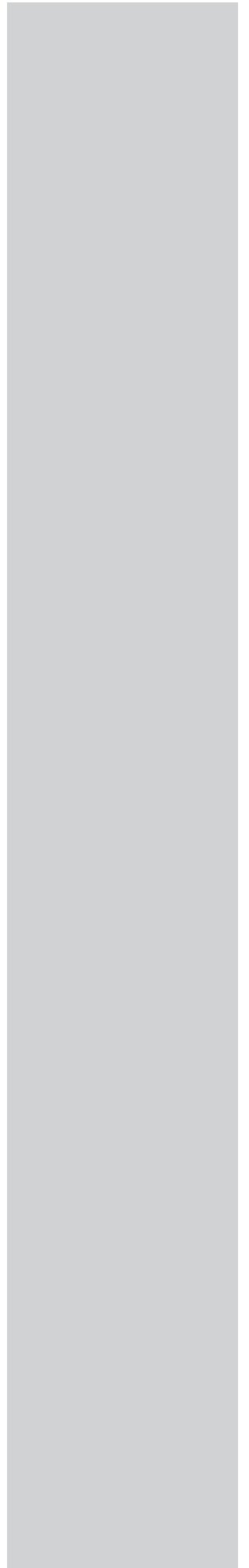
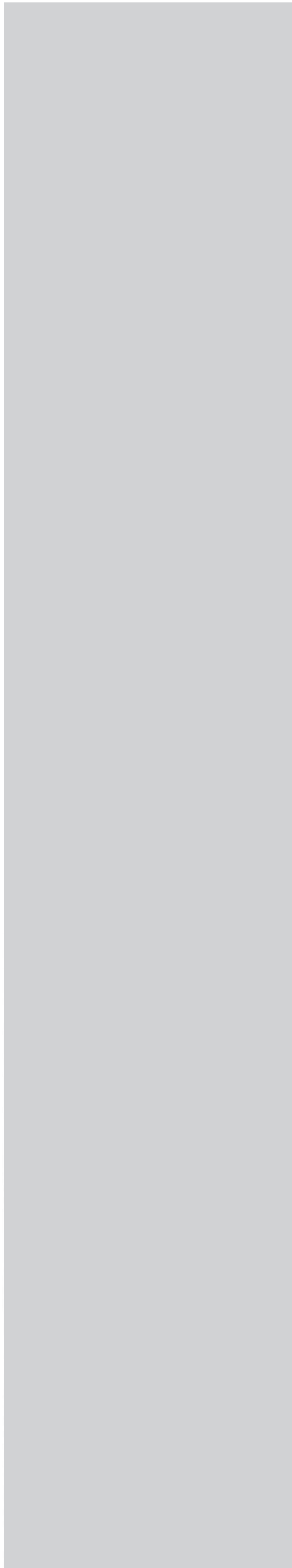
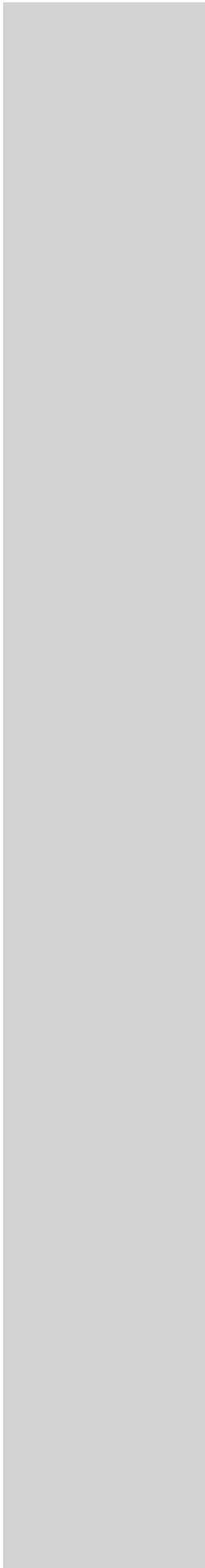


(一)-㉓ 毛利隆元 寄進状

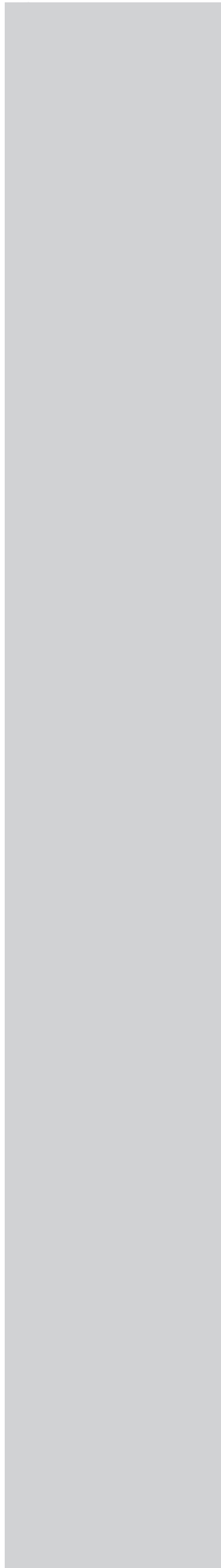
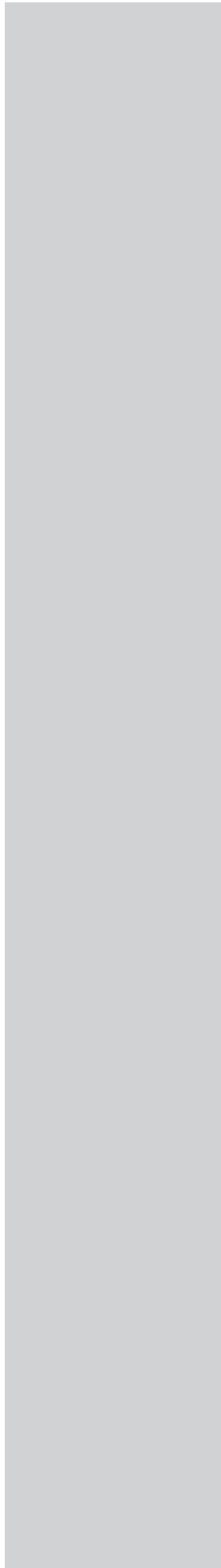
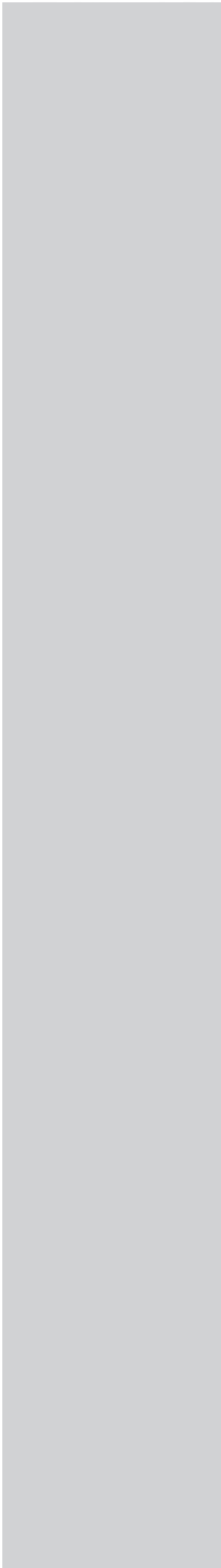
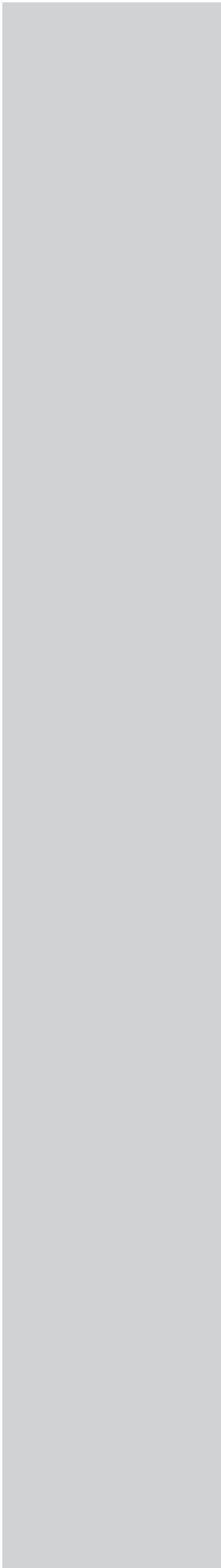


(二)-② 本多美濃守忠政 寄進

(二)-① 矢田土佐守秀職 寄進

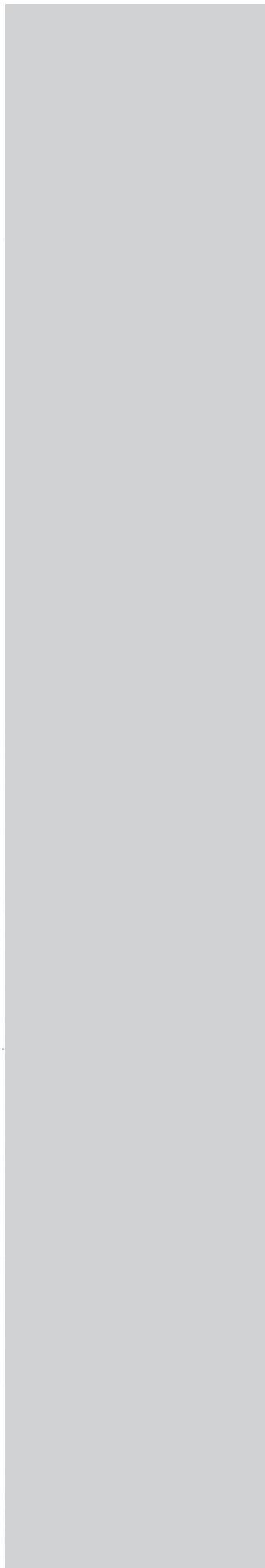
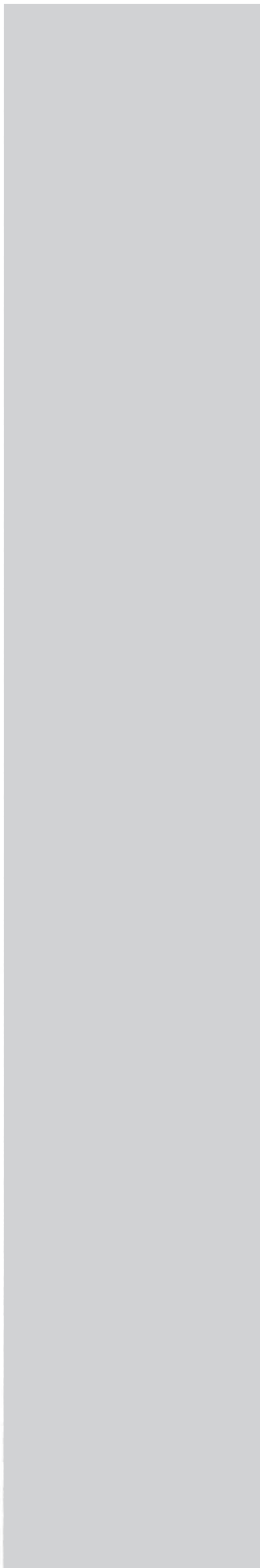
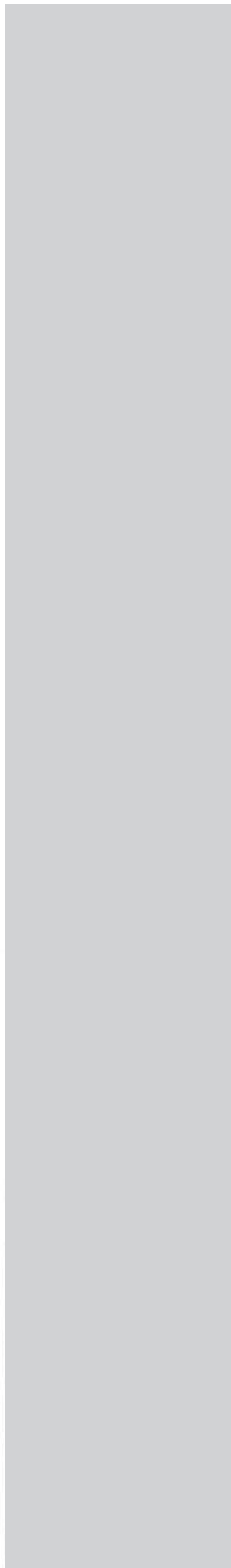
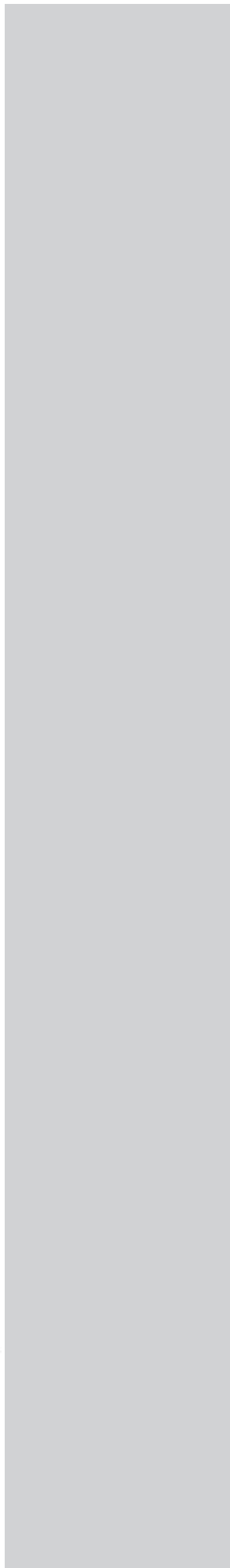


(二)-④ 高力左近大夫高長 奉進納



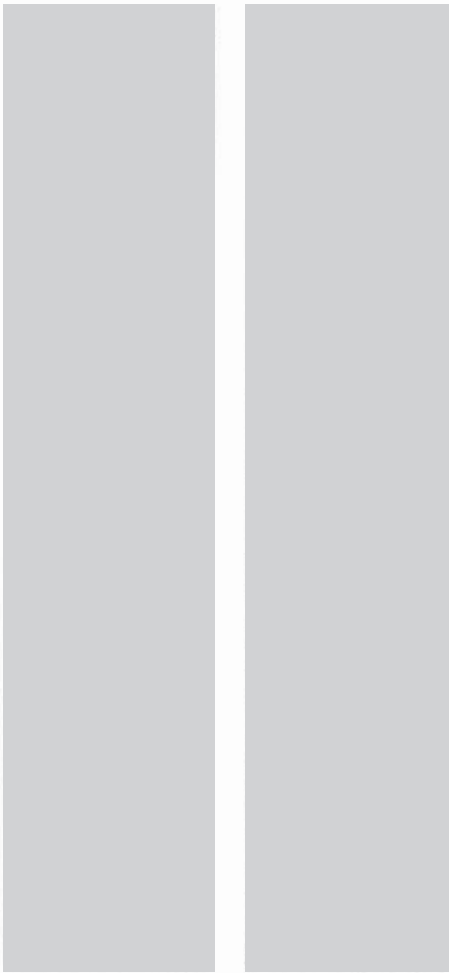
(二)-⑧ 芸州住源国作 奉納

(二)-⑤ 芸州住兼則 寄進

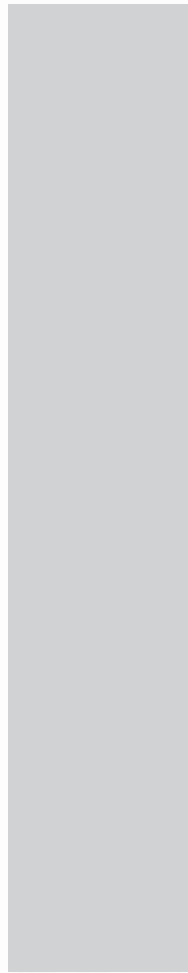


(二)-⑬ 江尾兼参 奉納

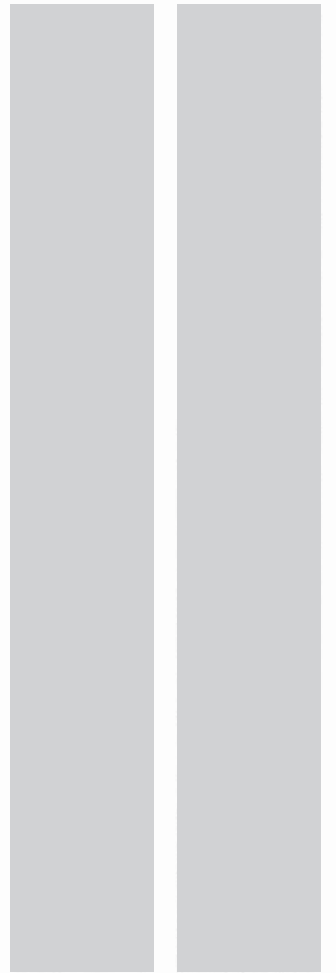
(二)-⑪ 川合伊左衛門知尚 奉納
川合八右衛門兼正



(三)-⑥ 茶屋清次 奉納



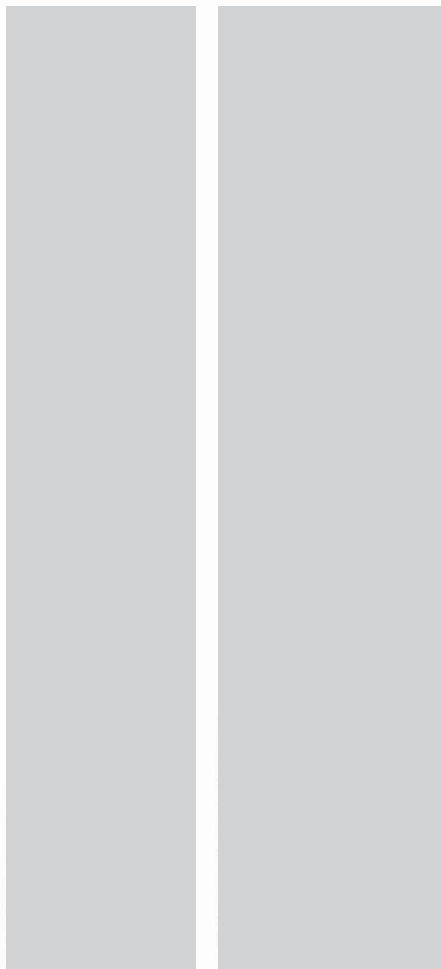
(三)-⑤ 足助久一郎正矩 奉納



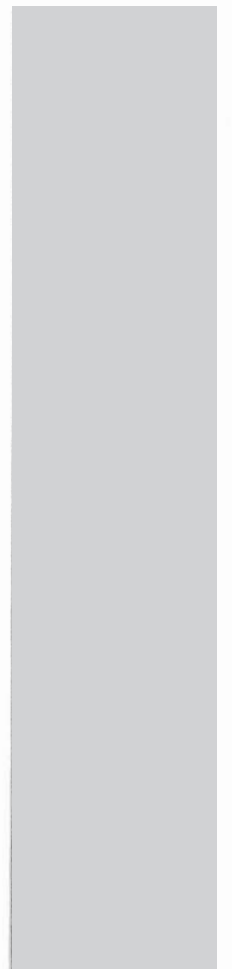
(三)-④ 糸屋武右衛門 奉納



(三)-⑨ 塩谷大四郎藤原正義 奉納



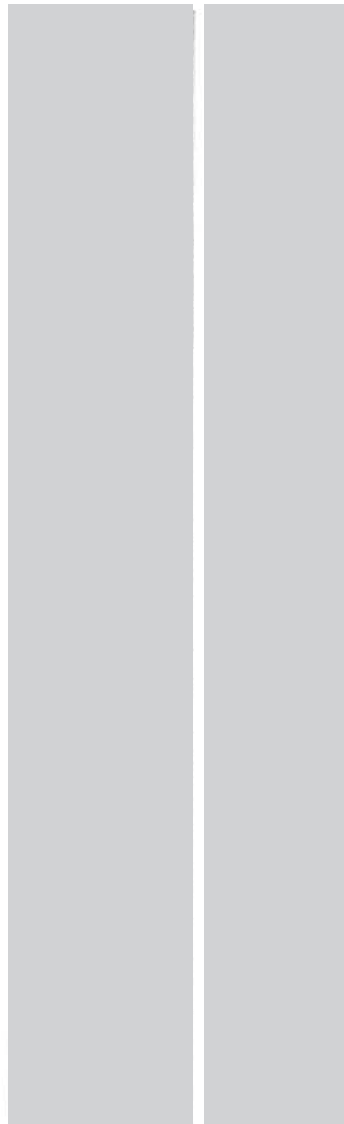
(三)-⑧ 西尾直香 奉納



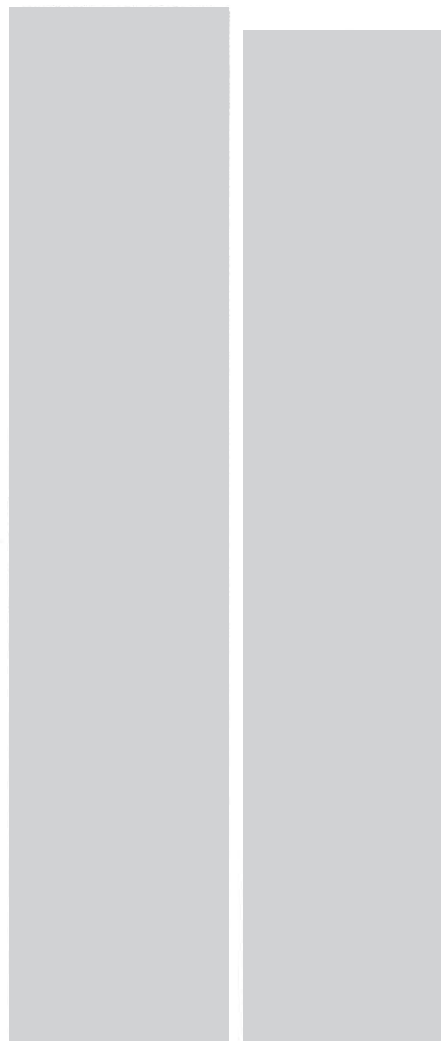
(三)-⑦ 研師惣次郎 奉納



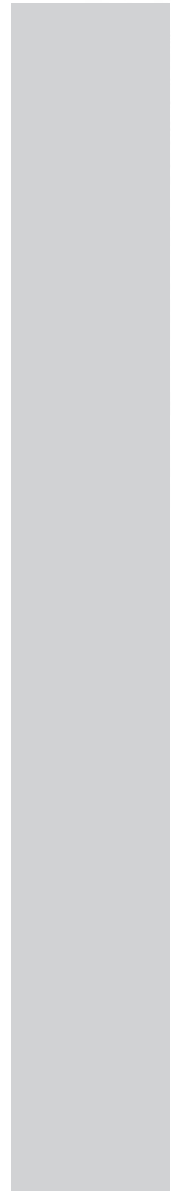
(三)-⑭ 矢部圭庵正之藏馬 奉納



(三)-⑫ 江尾弘三郎 奉納



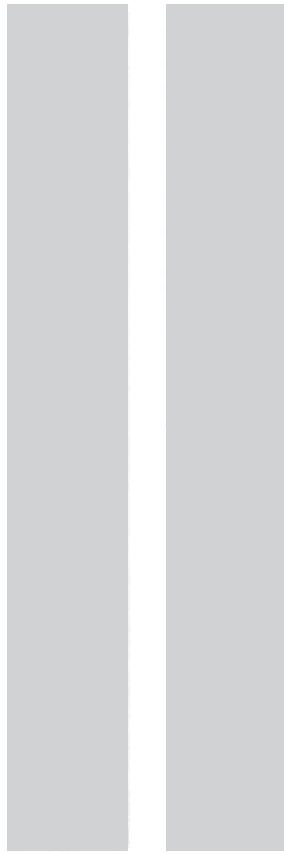
(三)-⑪ 矢野万蔵 奉納



(三)-⑩
村田新五郎 奉納



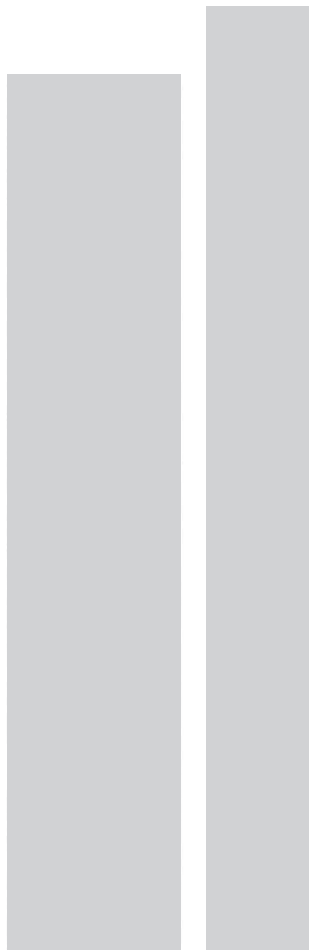
(四)-⑧ 柄巻屋才兵衛 奉納



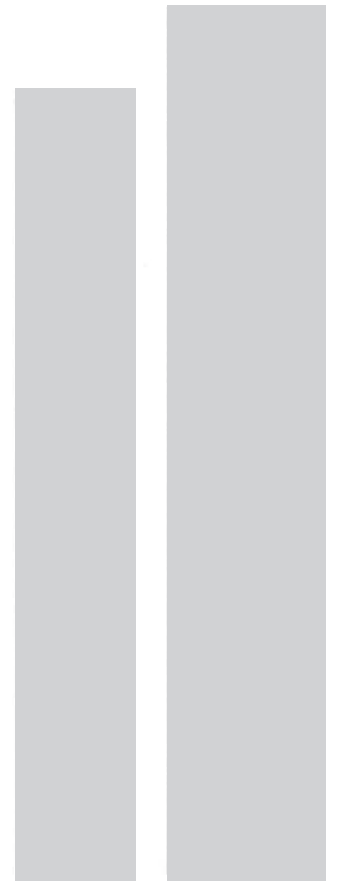
(四)-③ 光井忠右衛門可宜 奉納



(四)-⑨ 清市 奉納
(四)-⑩ 川上興三兵衛 寄進



(四)-④ 海老名十左衛門義俊 奉納



(四)-② 岡本和朝 奉納